【緊急特集　新型コロナウイルス流行と口承文芸研究】

樺太アイヌの流行病に関する伝承

阪口　諒

はじめに

本稿では、樺太アイヌが伝統的に流行病（具体的には多くの人が罹患し、身体症状を伴う疱瘡やインフルエンザ）の原因をどのように認識し、語ってきたかということに関して検討する。まず、歴史資料をごく簡単に見た後、病気の原因に関する語り、流行病への対処方法に関して見ていく。北海道アイヌの疱瘡の事例に関しては、久保寺逸彦・知里真志保「アイヌの疱瘡神『パコロ・カムイ』に就いて」『人類学雑誌』五五巻三、四号　一九四〇（以下、久保寺・知里論文）という論文において詳しく取り上げられているので、本稿では樺太の事例に絞って取り上げることにする。

一、歴史資料から

アイヌの様々な集団における天然痘の流行の歴史的な事例については、前述の久保寺・知里論文の記述のほか、和田文治郎の論文にも記述がある。[1] 一八六七年から一八七二年までサハリン島で軍医として勤務していたドブロトヴォルスキーによれば、樺太アイヌの人口の減少の原因は、アイヌ語でシーサム・アラカ《和人の病気》もしくはニシポン（ニッポン）・アラカ《日本の病気》と称する梅毒のほか、壊血病や急性発疹（麻疹）、猩紅熱や疱瘡であったという。[2] こうした病気はアイヌに限らず、サハリン島に居住してきた諸民族にとって脅威であった。一八六〇年ごろにサハリン島を調査した植物学者・地理学者P・P・グレンによると、疱瘡により、この十年間にサハリンの北部にある全ての村がひどい被害を受けたという。[3] 日本側の資料でも、一八五八年頃、サンタン人（大部分が後のウリチにつながる人々）の居住村の多いアムール川下流域から、サハリン北部にかけて疱瘡が流行し、サンタン人、「ロモウニクブン人」（サハリン西海岸のニヴフ）がサハリン島東海岸のタライカ地方へ逃れていることが確認できる。[4] こうした流行病によって村を離れるという手段は久保寺・知里論文で歴史資料を基にして述べられる通り、北海道アイヌの間でも取られていた手段である。

一八七五年の樺太千島交換条約によってサハリン全島がロシア領となったが、日本の強い影響下にあった亜庭湾沿岸の樺太アイヌ八四一名は、北海道（当初は樺太の対岸にある宗谷）へ移住した。狭い土地に密集して生活することは流行病の蔓延につながるため、開拓使の勧める札幌近郊の対雁への更なる移住を樺太アイヌたちは拒絶していた。しかし、移住は開拓使により強制的に実行に移された。樺太アイヌたちの先見の明は活かされず、対雁や厚田においてコレラや疱瘡が蔓延し、約半数が亡くなっている。[5]

一八九七年には樺太西海岸で疱瘡が流行しているが、その時には惣乙名のニセンルシが自ら家に火を放ち、自分の命と引き換えにその蔓延を防いだという。[6] サハリンに流刑となっていたポーランド人民族学者B・ピウスツキによれば、一九〇五年ごろにはサハリン島でインフルエンザが流行したが、その時には、木の株で作った木偶（その働きについては後述する）を用いた対処が行われたという。[7] 戦後北海道へ移住した北西海岸の樺太アイヌの記憶の中にも、悪疫（ウェン・アラカ）の流行が鮮明に残されている。[8]

二、病気一般の原因に関して

樺太アイヌは伝染病をオヤシ（化物）によるものだと考えている。[9] 例えば、一九〇四～五年にサハリン島でインフルエンザが流行したのは、アイヌの集落を敵意ある他のシャーマンの精霊の襲撃から守っていたマングンが亡くなったことによるという。[10] かつてサハリン島でアイヌとともに仲良く暮らしていたマングンのシャーマンは、そこを離れてからもアイヌの集落を守っていたという。こうした敵意あるものによって病気がもたらされるという考えは、アムール・サハリン地方に居住するニヴフの伝承にもみられる。[11] また、シャーマンが悪さをするという伝承もしばしばみられる。[12]

また、病気の神（原文は disease god）に関する樺太東海岸白浜の物語が記録されているが、その伝承において、食物の神が病気の神よりも力が強いことが示されている（病気の神は文化英雄ヤイレスーポにやっつけられるが、食物の神は逃げ延びる）。[13] それ以外には説明がなく、病気の神に関しては不明な点が多い。

なお、病気への対処法としては、その撲滅を願うというよりは、病魔に立ち去ってもらうというのが基本である（適切に処理されなかったために化物に変じた道具が退治・抹消されるという例はある）。[14] それは子供がくしゃみをした時に、「チルムンカタ　エチイメヘペ　ウコソーミ　テアン！（ごみための上に、お前の分け前が、饐えてるぞ！）」と唱えるということからも知られる。塵垢に呪力があるために、ごみ溜めに病魔は近よらないが、こう唱えることによって、怒って立ち去るのだという。[15] こうした汚物を用いた病魔の遠ざける種々の方法は久保寺・知里

前掲論文に紹介されている通り、北海道においても実践されている。

三、疱瘡の原因に関して

樺太の伝承において疱瘡に関する情報は多くない。記録された物語の数も限られているので、単純に比較することはできないが、疱瘡に対する観念が北海道アイヌのものとは異なっていたという可能性もある。久保寺・知里論文においては、疱瘡神が眷属の多い神であること、年々歳々訪れてくる神であること、常に沖の国から来て沖の国へ去ること、世界の果てから果てへ回って歩く神であることが指摘され、そうした性格は疱瘡神が渡り鳥であることから理解されるとしている。樺太においても、疱瘡神が渡り鳥と考えられていたらしいことは、西海岸南部、真岡においてシカトロ・チカハ（チカハは鳥の意味）という語彙が記録され、渡り鳥の一種で、疱瘡神であるとされていることからも確認できる。[16]

しかし、樺太北西海岸の話者は、音の似たシカタロ・カムイという存在を疱瘡と結びついていない。シカタロ・カムイは半人半鳥で、空を飛んでいるときはカモに似た姿であるが、地上に降りると人の姿をとると考えられている。アザラシが好物で、人間の姿で、アザラシを狩るための舟と、その肉を焼くための鍋を人間たちに求めるという。その義務を果たせば、人間たちはシカタロ・カムイが鍋に残したアザラシ肉を得ることができる。それを果たさない場合には、人間たちは殺される可能性がある。これらの活動は夜間にのみ行われるという。[17]

ここでは、樺太東海岸の小田寒出身の女性が語った疱瘡神たるパコロカムイ（この方言ではパ（ー）コロカムイという語形が期待される）に関する数少ない物語を紹介する。疱瘡神が村々を渡り歩いていることは確認できるものの、それが鳥として渡ってくるものであるのかは、語られていないため不明である。

いつの頃か分からない昔に、小田寒の近くまでパコロカムイ（疱瘡神）がやってきた。この集落は、五～六〇戸もある大きな集落であった。この村にトンコリ（五弦琴）のとても上手な弾き手がいたが、パコロカムイが村に来そうな気配を感じたので、一晩中トンコリを弾いた。この人はこの神が嫌うものや魔力を弱めるものをつぎつぎに演奏したので、パコロカムイはこの村を通り越して隣りの村へと去っていった。隣りの村の人々は一人残らず死んでしまった。[18]

病気への対処としては、前述のくしゃみをした時の対処と同じく、トンコリによる曲の演奏という、[19]病魔の嫌うものを用いることによって、病魔に立ち去ってもらうという方法をとっており、病魔を滅ぼすといった描写はされていない。[20]

四、流行病の予防に関して

先に述べた通り、伝染病はオヤシ（化物）が原因と考えられている。伝染病が流行ったという知らせを受けると、口承文芸の中で最も崇高なジャンルで、戦の物語であるハウキ（英雄叙事詩）を男性の長老が謡う。その後、集落の男性たちは、化物退治に欠かせない神々の助けを得るため、神々が喜ぶイナウ（木幣）を捧げる（神々は直接化物を倒すのではなく、人間による化物退治に協力するだけである）。また、戸口の上方には化物を追い払うために、排泄物の臭いのするシカタロ・キナ[21]の茎を吊るす。[22]前述のシカタロ・カムイと関連があるのかは語られていないが、北海道だけでなく、樺太の西海岸南部においても疱瘡神としてシカトロ・チカハという語彙が記録されていることからして、もともとはシカトロが疱瘡と関連していたものと推測される。[23]ただし、西海岸北部で用いられるシカタロという語彙は、前述のシカトロなどとは由来が異なり、北海道でシクトゥル～シクトゥッと呼ばれるエゾネギ[24]と関連ある名称ではないかと思われる。病魔を避けるときに戸口に吊るされるシカタロ・キナはギョウジャニンニク、エゾネギと同様にネギ属の植物とされ、強い臭気を持つ。[25]おそらく疱瘡を避けるための植物の名前（シクトゥルなど）と類似する疱瘡を司る病魔（シカトロなど）の名前との混同によって、両者の名称がそれぞれシカタロ・キナ、シカタロ・カムイになったのではないかと思われる（ただし、シカタロ・カムイが疱瘡神ではないことは前述した）。

また、化物（伝染病に限らず、村を襲いに来る化物であれば効果的なようである）を追い払うために、ケネ（ハンノキ）、オソコニ（ニワトコ）、タハニ（シラカバ）の切り株を使って、刀を持つ戦士の姿をしたオケン／ニーナンコロペ（木偶）を作る。[26]ハンノキがオケンの製作に用いられるのは、臭いが神にとっても化物にとっても不快で、洗っても臭いが取れないとされる経血に色が似ているためであるとされる。[27]この木偶は、ペヘサムシ（スゲ）の束や子犬の頭骨を木の棒に固定したものと一緒に、集落（夏の家は海岸にそって一列に並んでいる）と海岸を結ぶ道の脇に置く。戸口には、香りの良いウイターニ（ハイネズ）の枝が置かれており、それがオケンの上にも置かれる。化物が近づくと、オケンが動き出し、集落から化物を追い出す。口承文芸において、オケンが村を襲いに来た化物（ウンカヨホ《人食いオヤシ》）を追い払おうと活躍する様子が次のように語られている。

人喰いオヤシが浜からの道に沿って上ってきたので、子犬の頭骨たちも一斉に大声で吠えたて、スゲの束は体を揺らして揺らして踊って踊った、例のオケン（木偶）たちが踊り、刀を振り回して踊り、一生懸命だったとさ。そして、子犬の頭骨も大声でワンワン吠えて、スゲの束も一斉に足を踏み鳴らして踊って、転げまわるように、みんな一生懸命だったと。[28]

それを見た人食いオヤシたちは舟に乗って沖へ行き、自分たちの国へ帰ったという。第一節で述べたように、一九〇四～五年にサハリン島でインフルエンザが流行した際、病魔を追い払うべくこの方法が用いられている。なお、疱瘡に罹患してしまったとき、効果があるのは月経血で、それを疱瘡が原因でできた皮膚のブツブツに塗りつける。月経血の不快な臭いが病魔を追い払うのだとされる。また、赤いミズゴケが代用されうるのは、色が月経の血と似ているからだという。夏には新鮮なもの、冬には乾燥させたものを茹でて罹患者の体に押し付ける。また、疱瘡に伴う高熱で胃が焼けてしまうので、水をできるかぎり飲むようにする。[29]

終わりに

以上、樺太アイヌが伝統的に流行病をどのように認識していたのかに関して、口承文芸の事例も交えて検討した。樺太アイヌの流行病に関する伝承の記録が多くないため、他のグループのアイヌとの認識の差異など不明な点は数多く残る。非常に限定された数の伝承からであり問題は残るが、悪意あるシャーマンによって病気が流行するという語りが樺太には存在すること、また、樺太の内部でも、シカトロ・チカハ（西南部）～シカタロ・カムイ（北西部）に関する語りが異なっていることを指摘することができる。それ以外の点に関して、北海道をはじめとした地域とも共通していると思われるのは、流行病の際に病魔を滅ぼすのではなく、病魔の嫌うもの（臭気の強い植物など）を用いて、遠ざけるという方法を用いているという点である。その際、臭いのする植物、木偶（北海道ではイモシノヤなどと呼ばれるヨモギの草人形）を用いる点など似た部分も多いことが確認できる。今後、資料の整理などによって新たな伝承が見つかることを期待したい。

注

（1）和田文治郎「樺太アイヌの『なぐし』物語―樺太アイヌの治病術―」『樺太時報』第五〇号　一九四一

（2）Dobrotvorskij, *Ainsko-Russkij Slovar'*. 1875, Kazan'.（以下、ドブロトヴォルスキー『アイヌ語ロシア語辞典』）三三頁。

（3）ドブロトヴォルスキー『アイヌ語ロシア語辞典』三三頁。なお、天然痘（疱瘡）はアイヌ語でホーソーもしくはホーソー・イコニ（疱瘡の病気）であるという（『アイヌ語ロシア語辞典』四〇三頁）。

（4）東俊佑「幕末のサンタン交易について」『北方の資源をめぐる先住者と移住者の近現代史：北方文化共同研究報告』二〇一〇　北海道開拓記念館　二二二頁。なお、北西海岸のアイヌでは、妊婦を隔離された場所に移動させることはあっても、このような抜本的な措置はとられなかったという（Ohnuki-Tierney, Emiko, *Illness and Healing among the Sakhalin Ainu*. 1981, Oxford University Press. 六五頁）。

（5）当事者による記録として、千徳太郎治『樺太アイヌ叢話』一九二九　市光堂　三七～四一頁、山邊安之助著、金田一京助編『あいぬ物語』一九一三　博文館　三九～四〇頁がある。

（6）樺太アイヌ史研究会編『対雁の碑』一九九二　北海道出版企画センター　二五頁。

（7）ピウスツキ「樺太アイヌのシャーマニズム」（和田完訳）高倉浩樹監修、井上紘一訳編・解説『ブロニスワフ・ピウスツキのサハリン民族誌』二〇一八　東北大学東北アジア研究センター［http://hdl.handle.net/10097/00123171］二九七頁。

（8）例えば、Ohnuki-Tierney, Emiko, A Northwest Coast Sakhalin Ainu World View. 1968, Ph.D. dissertation, Department of Anthropology, University of Wisconsin, Madison. 四九頁。ほかに、ウェンルエサン（日本領時代の宇遠）では、日露戦争前に疱瘡が流行したという（服部四郎「カラフト西海岸北部地名の共時論的研究」『樺太アイヌ地名小辞典』一九六九　みやま書房　二九頁）。

（9）Ohnuki-Tierney, *Illness and Healing among the Sakhalin Ainu*. 六三頁参照。その原因となるオヤシはウェン・カムイ（悪しき神）、ウェン・アラカ・カムイ（悪疫の神）、またはウェン・カミアシン（悪しき魔物）と呼ばれる。「カムイ（神）」と言及されるのは、人間への破壊的な攻撃を防ぐために、病魔を恭しく扱ってのことで、より露骨な表現を用いれば、ウェン・オヤシ（悪しき化物）、オンケ・オヤシ（咳の化物＝インフルエンザ）となる（同書二一九頁）。

（10）ピウスツキ「樺太アイヌのシャーマニズム」（和田完訳）二九七頁（注七参照）。

（11）なお、ほかの「神様」による襲撃については、ニヴフの伝説であるが、中村チヨ口述、村崎恭子編、ロバート・アウステルリッツ採録・著『ギリヤークの昔話』一九九二　北海道出版企画センター　一七四～一七八頁に記録されている。

（12）山本祐弘『北方自然民族民話集成』一九六八　相模書房　一二三～一三四頁。

（13）Carl, Etter, *Ainu Folklore: Traditions and Culture of the Vanishing Aborigines of Japan*. 1949, Wilcox & Follett. 一三九頁。日本語訳は拙著「樺太アイヌのオイナーB・ピウスツキとC・エッターによる英訳テキスト―」『北海道民族学』第一五号に収録。

（14）Ohnuki-Tierney, Emiko, Sakhalin *Ainu Folklore*. 1969, American Anthropological Association. 第八話。

（15）和田文治郎「アイヌの治療」『日本医事新報』一七二二号　一九五七　六〇頁。似た例は知里真志保『分類アイヌ語辞典　人間篇』一九五四　日本常民文化研究所　一三四～一三六頁。

（16）知里真志保『分類アイヌ語辞典　動物篇』一九六二　日本常民文化研究所　二一九頁。

（17）Ohnuki-Tierney, *Illness and Healing among the Sakhalin Ainu*. 二二〇頁。和田完氏は北西海岸出身の同じ話者から、「熊、犬、鳥等、特に sikator-cikah（シカトル鳥。この鳥は病気、災害を及ぼすもので、疱瘡神 pakoro-kamuj とも考えら

れている）の形を刻むと、その像が化物となって何代も祟り、人を殺すから避けなければならぬ」（和田完『サハリン・アイヌの熊祭』一九九九　第一書房　九三頁）という証言を得ているが、少なくともカッコで補われた sikator-cikah の解説は、他の地域の情報と混同している可能性がある。

(18) 北海道開拓記念館編『民族調査報告書』二　一九七三　三〇頁。

(19) トンコリを演奏することで、村を襲いに来た夜盗を眠らせ、魔神を追う力があるとも言われ（更科源蔵『歴史と民俗 アイヌ』一九六八　社会思想社　一六七頁）、楽器そのものではなく（トンコリがシャーマンの祭具であるという説には根拠がない）、その音、若しくは特定の曲に力があるのではないかと思われる。

(20) ただし、世界の初めにいた一つ目の巨大な化物夫婦は、守護神の助力のもと、少年英雄（文化英雄ヤイレスーポだという）によって退治される。参考：Ohnuki-Tierney, *Sakhalin Ainu Folklore*. 第一話、村崎恭子『カラフトアイヌ語』一九七六　国書刊行会　昔話一一話。そのほか、文化英雄（ヤイレスーポ）が守護神（チリキヤンクフ）の指示を受けて化物を退治し、抹消する話もある（Ohnuki-Tierney, *Sakhalin Ainu Folklore*. 第一～三話）。

(21) シカタロ・キナは、おそらくアリウム科の植物で、踏むと青くなるとされる白い鈴状の花をつける（Ohnuki-Tierney, *Illness and Healings among the Sakhalin Ainu*. 二一九頁）。

(22) 以上、Ohnuki-Tierney, *Illness and Healings among the Sakhalin Ainu*. 六三～四頁。

(23) 久保寺・知里「アイヌの疱瘡神『パコロ・カムイ』に就いて」で述べられているように、シカトロケ（北海道方言形）がシ「糞」カッ「形」オロケ「ところ」と解釈されるように、疱瘡の跡をシカッ「（鳥の）糞の形」と言ったことに由来すると思われる。

(24) 知里真志保『分類アイヌ語辞典 植物篇』一九四頁。

(25) 病気が流行する時には、樺太でも猛烈な臭気を有するギョウジャニンニクを家の戸口や窓口に吊したり、枕の中に詰めたりした（知里真志保『分類アイヌ語辞典 植物篇』二七八頁）。

(26) より詳しくは和田完『サハリン・アイヌの熊祭』一九五九　第一書房　三三頁参照。

(27) Ohnuki-Tierney, *Illness and Healings among the Sakhalin Ainu*. 六四～六五頁。

(28) Ohnuki-Tierney, *Sakhalin Ainu Folklore*. 第二話のアイヌ語原文より該当箇所を筆者が翻訳。

(29) Ohnuki-Tierney, *Illness and Healing among the Sakhalin Ainu*. 六五頁。

付記

本稿は科学研究費補助金特別研究員奨励費（課題番号20J11234）による成果の一部である。

（さかぐち・りょう／千葉大学大学院博士後期課程・日本学術振興会特別研究員）

【緊急特集　新型コロナウイルス流行と口承文芸研究】

韓国の巫歌「ソンニムクッ」（손님굿）

―天然痘の神をまつる儀礼／別神クッ・江陵端午クッ―

邊　恩　田

はじめに

二〇二〇年の三月ころよりこのかた、「新型コロナウイルス感染症 COVID-19」が世界的な大流行となり、非常に多くの人が苦しみ、そして亡くなっている。

この脅威に直面し、忘れさっていた「天然痘（疱瘡）」のことが思い出された。というのも、かつて二〇〇二年六月に韓国の江陵市の「江陵端午祭」で見た巫の儀礼「ソンニムクッ」が、伝染病の天然痘にかかわる内容であったからである。すでに天然痘という病気はないはずなのに、巫による儀礼が実際に行われていることが強く印象に残っていた。

筆者は、五月に連絡があった日本口承文芸学会の企画をきっかけに、この儀礼を思い起こしながら詳しく調べなおすことにした。口承文芸は〝現実〟のなかでいかにして生まれ、どのような役割をはたすのか、そしてどう伝承されていくのかという問題が、いま起きている感染症の大流行のなかで生々しく筆者にせまってきた。急ぎまとめたのがこの小稿である。

1　天然痘

過去、人類がもっとも恐れた伝染病の一つが天然痘であったという。筆者の体験をいえば、小学生のときに「種痘（しゅとう）」の予防接種を受けていた。当時、わたしたちはこの伝染病を「ほうそう」（疱瘡）と呼び、「ほうそうにかかる」と表現し、かかってはいけない病気だという認識を強くもっていたが、その注射の丸い痕が、筆者の左腕に今もはっきり残っている。しかし、一九七六年以降に生まれた人たちには、その予防接種の痕がない。なぜならこの年から、日本で「種痘」は実施されていなかったからである。

日本の「国立感染症研究所（NIID）」[1]によれば、「天然痘（痘瘡）」は「紀元前より、伝染力が非常に強く死に至る疫病とし